

うまい水が飲みたい！

篠宮佳樹*

子供の頃、魚を飼うのが1つの楽しみであった。家の近くの田んぼや川でコイ、フナ、タナゴなどをよく捕った。学生の頃、登山の途中に飲んだ渓流水のうまかったことは忘れられない。その冷たさは熱くなった身体を冷まし、体力と精神力を回復させた（ような気がする）。そして透明さに感動した。クリアということに爽快感がある。高知県へ転勤してきてから、あらためて水の透明さに驚かされた。源流部の溪流では、透明な溪流をゆっくりと時には素早く泳ぐ魚（アユ？）たちはいかにも気持ちよさそうである。海も同様である。関東地方沿岸の海では見たことのない色、透明度だ。そんな水辺を見るだけで疲れがとれる気がする。飛躍しすぎているかもしれないが、水は生命の源というのが分かるような気がする。

溪流を遡れば、山の奥地の湧水点に達する。当たり前のことだが、雨が山にしみこんで土壌や岩のすき間から水は湧き出てくるのである。昨今は「○△の天然水」だとか「××an」だとか、水はコンビニやスーパーマーケットで買うものになっている。が、どれも結局は源流部の地表水や地下水を汲んできたものである。古来、人類は、各自の居住地域の水環境にあわせ、うまく水利用してきた。大局的には流域で水の収支を閉じるべきと思う。そうでないと争いや問題が起こる。そんな感覚が働くため、水を空輸したりするなど甚だばかばかしい。今のところそのような類の水は量的には少ないのかもしれないが、貴重なエネルギーを消費してまで運ぶ必要性も感じられない。今、我が家では浄水器を取り付けるか否かが問題になっている。私には浄水器を買うのはおかしめという感覚がある。水道料金を払っている以上、飲める水が蛇口から出てくるはずである。霞ヶ浦や琵琶湖など周辺人口に対して水資源を確保し難い場所なら話は分かるが、わが国でも有数の清流と呼ばれる仁淀川や吉野川に由来する高知市の水道が飲めないようなら日本は終わりだ、人類は破滅だ、という思いがあるので浄水器を取り付けるには抵抗がある。しかし、台所の蛇口の金網に、水道管の内壁が剥がれたような何かの破片が溜まっているのを見せつけられた。トリハロメタンとか、そのような類の難しい化学物質については、1庶民ではどうにもならない。水の安全を見極めるには多様な側面から

検討する必要があると思うが、1つここで言えるのは、必ずしも安心して水を飲めなくなっている事である。四万十川源流部の天然林へ調査で行くが、そこに溪流が流れている。以前はこの水を飲んだり、ペットボトルに汲んで帰ったりしていた。情けないことだが、最近はこの水ほんとに飲んでも大丈夫だろうかと思う。多分大丈夫なはずなのだが、その場で飲むことはしなくなってしまった。

話題を土に移そう。いつの時代も川に水を流し、安心して飲める水を供給し続けてきたのは、山があったからである（勿論ダムやため池でも水をコントロールできますが）。山は土砂崩れなどで人々の生活、時には生命を脅かすこともあるが、普段は安全な水の供給源である。我が国の場合、国土の約2/3は森林であり、山の存在は珍しくもなともない。最近では林業・木材産業との関係において経済的な価値を見い出せない人工林も非常に多い。資本主義に偏重した見方では、ありきたりの山々については一見価値を見出しにくい。されど、大事な水の供給源である。安全でうまい天然の水は、雨水が土壌からしみ込んで湧出点へ来るまでにいくつかの物理・化学プロセスを経て形成されると思われる。しかし、我々はその中身をよく知っているわけではない。許容範囲を気にすることなく使っていればあつという間に水はなくなるし、大丈夫と思って自然に還した物質が実は溪流を汚していたりする可能性はゼロではない。このような状況を放置しておけば、将来安全な水を求めた争いすら起こるのではないだろうか？と懸念する次第である。これまでのところ、それらの水資源を守るためには、少なくともまず土壌を保全することが重要ということは分かってきた。土壌は大量の雨水をしみこんで涵養するのである。それはゆっくりと流すことにつながっていく。土壌あつての安全でうまい天然の水なのである。繰り返しになるけれども、土壌が渓流水の量や質に対してどのような役割を果たしているのか、十分に理解されてはいない。現状では安全でうまい天然の水が未来永劫存続できるか保証は無い。実は、私自身これまでの研究生活でフラフラして定まらない部分があった。しかし、今になって思い返すと、これら山の水に関連する想いは私自身の研究をする、あるいは仕事する動機となっていたと思え

る。自分勝手な言い方をすれば、うまい水をずっと飲みたい、水中を気持ち良さそうに泳ぐ魚達を見続けたい、という願望のために働いているともいえる。山の水に関して抱いた懸念を払拭するためには土壌物理学もしっかり理解することが肝要である。

岐路を見失った時あるいは迷いが生じた時、再度動機を思い出してみてもうどうだろうか？そうすることで必要なものは何なのかはっきりしてきたり、自分を動かすエ

ネルギーを充電したりすることができるのではないだろうか。土壌関係者ならおそらくフィールドに愛着を持っている人が多いと思う。天気の良い日にフィールドへ出てみると、忘れかけたものを思い出することができるかもしれません。

受稿年月日：2004年8月31日

受理年月日：2004年8月31日